創立60周年を明後年に控え 記念行事・同窓会の歩み

同窓会顧問　石関力太郎

母校が呱々の声をあげたのは昭和四年、昭和六十四年には創立六十周年を迎えることになります。

戦前の夜学、戦後の定時制、特に女子系の学校として、母校は都内で最も古い歴史をもっている。府立第一（現白鴎）、府立第三（現駒場）が昭和十五年に夜間部を設けていることをみても、母校の創立者丸山文作先生の卓見がこのことを如実に物語っている。当時、男女の格差は家庭でも職場でも甚しく、男女平等の今日、想像以上のものがあった。このことは旧制の先輩の皆さんが身をもって体験されて来たことでしょう。

このような時代だからこそ女子教育に対する社会の要望は日に日にたかまり、昭和十五年、母校への志願者は募集人員百名に対し、応募者が約六百名に及んだといわれています。したがって優秀な人材が集まり、今日の母校の伝統が築かれるようになったものと思われます。

終戦前後の混乱期にも、幾多の困難にも拘らず、母校の教育は継続、昭和二十三年、新制高校が発足、併設中学も設けられ、高校に移行しました。同年都立第六女子高校となり、昭和二十五年、現在の校名都立三田高等学校となりこの年から男女共学制になりました。

戦前の同窓会は在校生と力を合せ、立派な会誌を発刊、毎年の総会、記念行事なども同窓会・校友会が一体になって盛大に行われました。

高校になってからは、昭和二十五年九月第一回の総会が開かれ、その後毎年学校の行事に合せて、総会が開かれて来ました。

昭和二十九年、戦後の混乱も漸くおさまり、創立二十五周年記念式典が行われ、記念誌が発行されました。

昭和三十四年、創立三十周年記念式典が挙行され、記念誌が発行されました。

諸設備の充実と共に同窓会からは生徒用のピアノ一台が寄贈された。また「ともかき」第一号が立派な活版刷りで発行されたが、その後続かなかったようで、五十周年を機会に復刊されたのです。

昭和四十一年、鈴木清太郎先生や役員、幹事の方々のお骨折りで旧制第一回の卒業生から高校卒業生まで卒業順に並べた名簿（グリーンの表紙）が作成されました。

昭和四十三年六月、役員の中村幸子（旧川崎）さんらが中心になって、久しぶりに総会が開催され、開校当初の松田正義先生初め、金野、内田両前主事先生、旧師、第一回卒業の杉山こうさんなど多数会員が出席、盛況だった由です。

昭和四十四年、創立四十周年記念式典が挙げられ、記念誌が発行され、若葉会館で祝賀会が催されました。

昭和四十五年五月、同窓会幹事総会が開かれ、同窓会の名称、名簿作成、新役員の選出など協議された。その後、校舎改築など諸般の事情もあって七年間の空白状態がありました。

昭和五十二年、新校舎落成式典があり、同窓会は備品費の一部として、十万円を寄贈この時を契機に、会復活の機運たかまり、幹事会が招集され、富川孝恭（34年卒）氏を会長に推し、五十周年に向け、活動を開始した。記念行事は学校、同窓会、PTA三者が一体となって推進。昭和五十四年十月、記念式典を挙行、記念図書の寄贈、秦山木植樹、祝賀会を行った。従来、各記念誌は三田学苑の記念号として出していたが、今回は五十周年にふさわしい単行本で美装箱入のものを現顧問中村十成先生のお骨折りで作りました。また五十三年「ともかき」復刊第一号を発行、住所の判明している会員に送付、五十周年のPRを行った。その反響は大きく、寄付金も集り、名簿改訂の弾みになったのです。

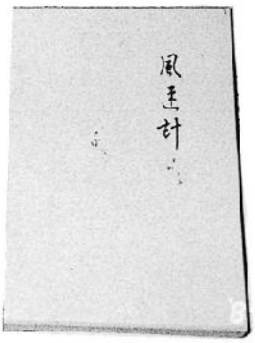
昭和五十五年三月富川会長に代って、石田弘（29年卒）氏が会長になり「ともかき」発行を続け、今回で十一号となる。また十一月二十三日（勤労感謝の日）を同窓会の日と

母校六十年の歴史、多勢の卒業生がいます。日頃多忙のうちに忘れていたことも、六十周年を機会に会員一人一人が在学時代を思い、青春時代と現在を考え、恩師の消息、もその一つです。その発送には名簿が正確でなければなりません。現在、五十周年名簿の改訂を進めており、この点でも、皆様のご理解を願って止みません。

一甲州人の起伏に富んだ人生を小説風につづった伝記。東山梨郡西保村の農家の四男に生まれた結城中也は関東大震災のころ上野原で巡査、その後、中国大陸へ渡って医師。戦後は外国航路タンカーの船医から、老人ホームの管理医として86才の生涯を終える。

明治、大正、昭和と時代の荒波にもまれながらも、常に意志をもって前へ前へと歩き続けた「勤勉な生涯」文章もいい、読ませる一冊だ。（山梨日日新聞―評より）

著　者　長谷川芳貞（元本校教諭）
発売所　筒井書房（東京都練馬区富士見台2-29-13）



猛勉強の末、50代に国家医師免許を取得した主人公は、その後海上の医師となり、77才で船を降りた。しかし、チャレンジ精神に燃える老医師は、更に新しい境地を求めて老人ホームに住み込み始めた。

著　者　平田八千代
発行所　至芸出版
東京都渋谷区代々木一-六〇-五
定価　一、五〇〇円

著者は第8回（昭和14年3月）の卒業生で、旧性比留間さんです。父を早く失い、母へ寄せる心情が歌集にも漲って居ります。或る日店頭で手にした短歌入門書「女性短歌読本」（今井邦子著）の見返しに記された『いにしへもかくてありけり今も尚かくてありなんしきしまのみち』に魅せられ、精進した由。15年に「明日香」に入会、詠歌の投稿を続けられ、その間、健康に恵れなかったご主人と二人のお嬢さんの相手と家の商店経営、ままならぬ生活の中で60年初まで詠み続けた作を自選し掲載されたとの事。多く教えられるものがあります。

きめ、昭和五十五年以降、総会と懇親会を毎年母校で開き、今回で八回目を迎えることになります。この十年間、同窓会活動は着実な歩みを進めております。

級友の現況など知りたいなどそれぞれに感慨があることでしょう。同窓会は会員皆様のこうした母校とのつながりに何か手助けになることを考えております。「ともかき」発行

六十周年を迎える具体策は現在協議、検討中で、楽しい行事、心に残るイベントにしたいものと考えており記念事業を会員皆様の協力で成功させたいと思います。（元教諭）

母校職員の異動状況

○ご転任
森井節子さん（事務）
都立大森高校（全）へ
中崎裕江さん（司書）
都立世田谷工高（全）へ
野崎照子さん（給食）
都立大森高校へ

○ご退任
塚谷トシ子さん（給食）

○ご着任（新）
渡辺玲子さん（事務）
佐藤真一さん（司書）

昭和61年度「北原奨励賞」受賞者 〝荻野善郎君〟

◇全国定時制・通信制創立四十周年記念祝典挙行さる

去る八月五日国立教育研究所大講堂に於て、中曽根総理大臣、塩川文部大臣・平井労働大臣ご臨席のもとに全国から各関係者参集盛大に祝典が催されました。その席上、教育功労者として左記先生が表彰を受けられました。

○中村十成先生（国語）
○奥平象二郎先生（数学）

□先生がたの近況

○久保道雄先生（元教頭）
都立中央就学相談所
○菊池康夫先生（元教頭）
都立教育研究所
○中村十成先生（元教諭）
東海大学へ

第十三回生の思い出・動行

小林悦子

私たちは昭和十五年府立六高女夜学校一部に入学、一、二年は安部世意治先生、三、四年は浅田（北山）素子先生に担任して頂き誤開の始まった昭和十九年同級生三九名で卒業しました。五十周年記念誌の七回生から十四回生までの思い出の文を読みますと、あの頃の制服姿、校舎、照明下の体育など映の裏にありありと思い浮かび懐かしさ一杯になります。

卒業後東京は戦火に見舞われ級友も散々になりました。何人か消息がわかり級友の久保田さん宅で始めて集まりを持ったのは二十五年の秋わずか五人でした。その後だんだん近況がわかり疎開地で結婚された方なども有って大宮、浦和、旺井沢でクラス会を開いたこともあり、大体十五人ぐらいは何時も集まりました。子育てが終わり近くなると、一泊旅行が計画され夜を徹して話し続けることもたびたびでした。五十六年からは一年に一度開かれるようになりました。卒業後四十年余り、級友を三人失い、健康の大切さを痛感し人生の残り少ないことを思い知らされました。そこで在学中出来なかった修学旅行を兼ねて、四十三（3面へ）